

連携・協働を生かし、生徒の学力や意欲の向上を目指した取組

与謝野町宮津市中学校組合立橋立中学校

全国学力・学習状況調査の結果における特徴

国語A、Bについては、全領域で京都府平均を上回る結果であった。また数学A、Bについては、全領域及び全観点で京都府平均を上回る結果であった。正答数の相対度数分布のグラフを参考に中学1年時の京都府学力診断テストと比較すると、中学2年時の京都府学力診断テストに引き続き、低位層が減少し中位層に移行していることが見受けられる。

詳細に見ると国語では、中学2年時の京都府学力診断テストでも現れていた「言語に関する力の弱さ」、「書くこと（文章化すること）への苦手意識」という課題が改善できていない実態が見られた。また数学では、中学2年時の京都府学力診断テストで唯一府平均を下回っていた「関数」領域において、大きく府平均を上回る結果に転じたことが特徴として見られる。しかし、設問の仕方が変わると対応できなかったり、自身の解答が何を意味しているかを十分理解していなかったりする課題も見られた。

全国学力・学習状況調査の結果に寄与したと考えられる取組

1 授業参観月間の取組

本校では、言語活動に視点を置きながら「思考力・判断力・表現力等を育成する授業」、「受け身でなく主体的に学びに向かう力を育成する授業」の構築を図りながら各教師の授業力を向上させるために10月～11月初旬にかけて、互いに授業を参観し合う取組を下記の方法で実施している。

- (1) 参観者は、時間割発表後、いつ、どの教科を参観するかを申請書に記入し教務主任へ提出する。
- (2) 教務主任は、授業者に分かるように参観者を記載した一覧ボードを職員室内に設置する。
- (3) 参観者は、事前配付されている参観用紙を持って参観する（学び合いメモ）。
- (4) 参観者は、教務主任へ参観用紙を提出し、その後、教務主任が参観用紙を当該授業者へ渡す。
- (5) 教科部会や事後ミニ研究会などにつなげる。
- (6) 各自、期間中に複数教科を3回程度参観するよう努める。

また、教科の授業参観月間に続き、11月中旬～12月にかけて、道徳の授業においても同様に相互に参観する機会を設定している。

「授業を見て学びたい」と考えていても、様々な状況の中、実際には参観することが難しいところである。しかし、このように学校全体として期間を設定し、「見やすい・見せやすい」という仕掛けを作ったことで授業改善につながってきている。この参観月間は、それぞれの教師にとって「よい学びの時間」「よい関係づくりの機会」となっている。また、教師同士が学び、高め合う姿を見せることは、生徒自身の学ぶ姿勢にも変化をもたらしているように感じる。



2 授業スタイルの確立と学習チャンスの設定

(1) 自己診断カード

数学科では授業の初めに“今日の学習内容”を確認し、授業の終わりに“今日のポイント”を自分の言葉で記入する取組を行っている。指導した教師は、その記入内容を自己の授業改善につなげている。「ことばの力」を高めるための地道な取組ではあるが、授業をしっかりと聞くことにもつながられている。

(2) 「つづけるファイル」

特に学習課題のある生徒を中心に、京都府総合教育センター作成の“算数・数学なびツール”を活用して個に応じた課題を作成し、継続的な学習活動が行えるように支援を行い、昼休みには特別教室を開放して質問をできる体制もとった。小学校低学年からの課題に取り組む場合もあったが、少しずつ基礎学力の定着を図ることができた。不登校傾向の生徒に対しては、学習不安を解消する手立てにもなると同時に教師とのつながりをつくるためにもとても有効であった。

(3) 応用問題プリント

数学科では3年生を対象に単元が終了した後、授業ではなかなか取り組むことのできない課題や応用問題に自主的に取り組ませ、各自で職員室前まで提出するようにしている。従来、意欲のある生徒に対する手立てが不十分であったが、この取組は、すべての生徒が自ら学ぶ意欲を高めることに大いに役立っている。

(4) 週末課題

教科で週末（土曜・日曜）に取り組む宿題プリントを作成し、月曜日に提出する取組を行っている。提出させること、期限を守らせることにこだわって取り組んでいる。また、国語科では言語に関する弱さを克服するために同じ新聞記事（コラム）を活用しながら、1年生は「書き写す」、2年生は「要約する」、3年生は「自分の意見をもつ」という週始め課題に取り組んでいる。



(5) 土曜日を活用した学習会

1学期と3学期にそれぞれ2回ずつ、「自ら選んだ3教科を自主的に学習する」取組を行っている。学習形態についても、それぞれ落ち着いて取り組めるのであれば、個別でも少人数グループでも構わないことにしている。自ら工夫する中で友だち同士のつながりも強くなり、分からないことを放置しないような態度が育ってきている。

(6) 冬季単元別学習会

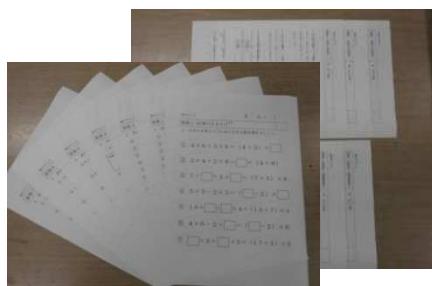
12月～2月にかけて2教科（数学・英語）で自主参加による単元別学習会を設定している。1年生が数学の時、2年生は英語を実施することにより、担当学年だけでなく全学年の教科担当が指導にあたり、また、担当教科以外も指導にあたるができるようにしている。原則自主参加であるが、学習課題のある生徒には教師が声をかけ積極的に参加できるように支援している。

3 校区小中連携推進会議の活性化

本校は宮津市と与謝野町を校区にもつ組合立中学校である。それゆえに、校区小中連携推進会議を形骸化させず学力向上対策や生徒指導に係る連携を充実させることは学校経営の要と考えている。この組織内に各小中学校の教務主任をメンバーとした学力対策委員会を置き、指導の連続性を図り系統性を検証しながら、さまざまな実践及び交流を行ってきた。

- (1) 校区共通の算数・国語プリントを学力対策委員会で作成（各小学校で実施）
- (2) 中学入学時の計算力診断テストの実施（第1回小中連携全体交流会で課題分析結果を共有）
- (3) 「小学校のどの学年でつまづいているか」を確認する追加課題を学力対策委員会で作成
- (4) 計算力定着を図るための手立ての実施（第2回小中連携全体交流会で実践内容を交流）

このように、京都府学力診断テスト（1年生）の結果公表前に独自診断テスト結果を活用して、校区小中学校全体で学力向上に係る研究協議ができていたことは大変意義あることと考えている。また、校区全体で誤答分析や学年課題分析を共通確認する取組を継続させ教科指導の改善を図っていることは、小中学校の教師が児童生徒の課題に即した実践を行おうとする姿勢につながっている。さらには、中学校の教師は小学校との連携をより強く意識することにより、それぞれの指導意欲や力量を確実に高めている。



4 授業改善ポイントの検証（各種学力診断テスト分析）

本校では、全国学力・学習状況調査及び京都府学力診断テストを担当教科だけの分析に留めないために年3回の校内研修会を開催している。教科担当は他教科の授業についても改善ポイントとして参考となることを意識して研修資料を作成している。

- (1) 診断テストや調査の結果は、どのような教科指導を行ってきたことによるものか。
- (2) 今後どのような授業を展開していけば、分析結果から見られる課題を克服できるか。

以上の2つの視点を大切にしながら研修を進めている。こうした中で、反復を意識した授業展開や学習課題の提示が基礎学力定着に有効であること、また、4人グループによる宿題の答え合わせや問題解決学習を取り入れることが生徒の学習意欲を引き出すと同時に学習内容のより深い理解につながることを検証することができた。